

「絶対計算と専門家」

四国経済連合会副会長(株百十四銀行取締役会長)

竹崎 克彦



政権交代が現実となって4カ月経った。色々な立場から意義や今後の日本の将来などについて語られている。現時点で評価することはむづかしいが、いずれにしても国益を基本に内外の諸課題に対して、「政治の専門家」が英知と経験を結集して解決に取り組んで頂きたいと心から願う。

情報処理技術の発達で、多くの分野で重要な役割を果たしていることは実感しているが、最近読んだ「その数学が戦略を決める」(イアン・エアーズ著)にはいささか驚かされ、同時にその光と影あるいは人の関わりかたなど考えさせられることが多かった。

この本では、色々な分野の専門家の予測が、「絶対計算」という手法を使った予測に見事に敗れる事例が多数とり上げられている。一例を挙げると、(ワインの質 $=12.145+0.0017\times$ 冬の降雨 $+0.0614\times$ 育成期平均気温 $-0.00386\times$ 収穫期降雨)なのだそうである。私にはワインの質も、この算式の意味や精度も分からないが、結果としてこれで評価されたワインが許容限度の範囲で認められるのであれば大変なことだと思う。ワインの評価は年月を経た熟成の結果、封を切って初めて評価されるが、この方法なら精度ある予測が収穫期に出来ることになるからである。当然、ワインの専門家(批評家や業界

関係者など)からは猛烈な反発を受けることになるがその経緯は省略する。

本書では、このほか高度の専門性が必要と思われる医者、裁判官、プロデューサーなどの分野での例も紹介されている。

「絶対計算」とは、「回帰分析」(説明したい変数に要因となる因子がどの程度影響するかを計算する手法)と「無作為抽出テスト」という、方法としては古典的なものが使われている。つまり、回帰分析では大量の実績データが不可欠であり、無作為抽出テストでは大量のサンプルが重要となるが、それを可能にしたのが桁外れの情報蓄積量や処理速度などの技術革新であるといえる。

大容量の記録装置と超高速の処理装置はさらに発達し、情報処理技術はさらに進化するだろうが、専門家はどうか対応すべきなのか。

著者も専門家を否定しているわけではない。ある種の仮説を立て、要因となるかもしれない因子を予想することに専門性を発揮すべきと考えていると思われる。専門家の勘や経験が精度の高い客観的なデータと融合することで、より良い意思決定が可能になるならば、専門分野のレベルアップが求められることになる。

新しい「政治のシステム」はどう機能してくれるであろうか。